

# 「入学試験学」の構築を！

— 「入学試験学会」を立上げよう\* —

吉川 敦†

## 1 まえがき

わが国の学校教育の論議では入学試験が必ず話題にのぼる。しかし、入学試験そのものが研究の対象として総合的に論ぜられることはむしろ稀である。入学試験に関する議論では、希薄な客観性、困難な検証性、突出した感性が特徴的でさえある。入学試験は、学校という組織体にとって、その機能の円滑な遂行に直結する学生選抜の極めて有力な方式である。学校が社会に占める重要な役割を想起するとき、入学試験について極めて浅薄な扱いしかなされていない現状は早急に改善されるべきであることに誰もが気づかなければならない。すなわち、入学試験学を構築し、あわせて、入学試験学会を立ち上げて、入学試験について冷静で客観的な知見を確立し、かつ、その合理的な展開を図ることを提案する。

## 2 入学試験学の趣旨

### 2.1 入学試験学の哲学

入学試験を一般の選抜原理に留意しつつ、人間の社会活動全体の文脈で考察する。特に、その目的、運営、設計、実施について、学力検定、能力検定との差別化を含め、総合的に位置付ける。

### 2.2 入学試験の評価

入学試験の出題政策とその合理性を論ずる。特に、入学試験による受験者の個別的な順位付けと受験者群の層としての就学能力の関連を論証、評価する。

---

\*数学教育の会 2003 年冬の集会（2日目：平成 15 年 1 月 12 日）

†九州大学教授（大学院数理学研究院）

## 2.3 入学試験と社会

入学試験に対する社会的関心や期待、政治的・歴史的状況の整理、行政及び学校経営に占める位置、受験誘引のための各種の政策を、それらの合理性、効率性を含め、検討する。

## 2.4 入学試験の分類

入学試験の形態、学校の水準との対比、海外及び歴史的事例の収集整理、及び、そのための有効な分析原理の探求を行う。

## 2.5 入学試験の工学

入学試験実施の技術的な側面を検討する。試験目標設定、想定誤差の事前評価条件、科目別特徴の分析と制御など、見込みどおりの入試効果実現のための基礎技術を確立する（例えば、設問や配点を含む問題設計が得点結果に及ぼす影響の事前予測技術の開発など）。

# 3 入学試験学の研究分野

## 3.1 選抜方式としての入学試験の特性

入学試験について、理念的、社会的、経済的側面を、個別の入試とは独立に、総合的、概括的な視点から論ずる。

## 3.2 各種教育機関の入学試験

入学試験は大学等の高等教育機関から中学高校等の中等教育機関、あるいは小学校や幼稚園などでも行われている。そのほか、編入試験、転入試験などもある。それぞれの固有の性格を分析し、整理する。

## 3.3 海外における各種入学試験

入学試験は世界中で行われており、それぞれの文化的背景が反映しているはずである。一方、科目の特性もあるであろう。あわせて、歴史的な入学試験の変遷についても論ずる。

### 3.4 想定受験者層の分離及び就学能力の推定技術

適切な入学試験問題の条件は対象受験者層の就学能力との適合性にある。したがって、対象受験者層の分離と就学能力についての事前把握技術が重要である。多重フィルター効果による誤差解消を企図して、入学試験と独立な傾向のものの開発・研究を行う。

### 3.5 出題内容及び出題技術

入学試験は、現状では、ほぼ学力検定中心の伝統的な安定した方法で出題され、問題に対する批判は難易度や解答の適否などについて行われている。出題科目固有の視点だけではなく、入試の本来目的を重視した総合的な観点から、出題内容及び出題技術についての検討を行う。

### 3.6 入学試験における誤差管理

出題内容、配点、採点などは、不可避免的に、入学試験結果に誤差を招く。許容される誤差水準の事前想定を含め、誤差管理の技術確立を図る。

### 3.7 入学試験の誤差評価の理論と実例による検証

入学試験の誤差の評価方式を提案し、実際の入学試験結果についての再処理実験などによって、それらの有効性や意義を検証する。

## 4 入学試験学会の構成と活動

### 4.1 構成

構成員としては入学試験に利害を有するものを糾合する。例えば、

1. 官庁（文部科学省、厚生労働省、財務省等、各地方自治体、教育委員会等）
2. 教育機関（国公立大学、私立大学、高専、短大、国公立立高等学校、中学校、小学校等）
3. 大学入試センター
4. 教員、教育関係者
5. 心理学者、社会学者、統計学者、情報工学者、医学者等の中立的学識者
6. 予備校、学習塾、参考書業者、模擬試験業者等
7. 出題採点側関係者
8. 受験生父兄、もと受験生、受験生予備軍
9. 言論機関関係者
10. 企業関係者

## 4.2 部会

§2、§3 に応じた部会を設ける。

1. 総合部会
2. 学校部会
3. 科目部会
4. 評価部会
5. 出題技術部会
6. 検証部会

## 4.3 活動

§3 の研究成果を広く公表し、入学試験に関する社会的な妄想を打ち破る。また、出題技術上の知見の関係機関による共有のもとで、入試の限界を承知し、合理的な誤差の評価を伴った、的確な目的設定による入学試験を設計し、実施するということを実現する。

## 5 質疑応答

第1問 入学試験なんて学問の対象になるのでしょうか？

— 回答：何でも学問の対象になります。もちろん、入学試験もなります。例えば、大学の入学試験を取り上げると、いろいろな要素が絡み合っています。大学や学部による入試科目の違いや、出題傾向、受験者数、合格最低点、平均得点などが重要視されます。入学試験は、しかし、単に、受験者たちに順番を与えるだけではないと思われており、公平性が主張されます。誤出題などがあつたときは、極めて形式的な対応が要求され、本来の試験目的に内在されているはずの公正性は二の次になることもあります。入試は、実は、相当に荒い水準での信頼度しかないかもしれないのに、合否判定で1点差を問題にするという奇妙なことも避けられません。昔から試験は水物と言われてきた一面にはこういうことへの認識があつたことは間違いありませんが、それでよしとしてきたことには説明が必要だつたはずですが、要するに、入学試験を選抜手段と考えれば、合理的な選抜法としての全体像の分析が必要なはずですが、それについてはほとんど手付かずではないでしょうか。まさに、入学試験を学問の対象にしなければならないわけです。

第2問 入学試験が学問の対象になつたとしても、学校関係者以外には無用なのではないでしょうか？

— 回答：基本的にはその通りです。しかし、入学試験は選抜手段の一種であり、人間社会のどんな組織体でもその成員の選抜には強い関心がありますから、入学試験についてのもっとも基礎的な研究、選抜目的と手段との整合性、短時間の限定的な試料調査からの人物に関する高精度の知見の獲得可能性の検討などは、一般社会にも立派に還元できる成果になると思います。

第3問 入学試験は、入学試験学なんてなくても、実施できるし、現に、実施されていると思いませんか？

— 回答：確かにその通りですが、入学試験には一種のいかわしさが付きまわっていませんか。入学試験を必要悪とする見方もあるでしょう。中には、入試こそ学力向上のもとだと言う人もいますが。まあ、入試は善であるとは言い

ませんが、社会的には極めて正常な選抜行為だと思います。しかし、それだけに合理的なものでなければなりません。入試の合理性に疑念が抱かれる限り、いかがわしい印象は消えないし、一方、入試に対して不必要な学力的な思い入れ — できる方からできない方から — がなされ、ますますいかがわしさが加重されるように思います。入試が正常な選抜行為であるという、入試に対する冷静な姿勢の確立のためには、入学試験学によって客観的な説明がされることが大切だと思います。

第4問 「数学教育の会」との関係がよくわかりません。

— 回答：ええ、まあ。でも、数学は重要な試験科目だし、できるだけ合理的な試験問題を出せるようになることで数学に対するいろいろな意味の誤解の解消もできるだろうと思います。それに、入学試験学会を立ち上げるためには核が不可欠です。数学教育の会は、高い見識と豊かな実行力のある方たちからなっていますから、活動の契機にふさわしいと思います。

第5問 想定受験者層の分離や学力推定がどうして問題になるのですか？

— 回答：入学試験というのは、基本的には受験者群の個人に番号を振る技術です。ただ、個人の人生に関わることであり、しかも、人生のごく一時期に、対象となる受験者群に属する個人についての限定的な情報に基づいて順位付けの判定をするものですから、受験者が達観して対処できるという性質のものではありません。現状では、受験生は、たとえば、大学の入学試験の場合だと、高等学校側の受験体制として、理系、文系、国立受験、私立受験などと早くからコース分けされて、即応性の高い「教育」を受け、あるいは、予備校や学習塾で、模擬試験などによる成績から算出した偏差値などによって、受験先を選別し、加えて、大学入試センターの実施するセンター試験による選択先の決定ないし絞込みを経てから、個別大学の受験に臨んでいると思います。一方、入学試験の実施母体である学校は、受験者あるいは入学者個人とは異なる時間単位で存在します。しかも、個々の受験者よりは集団としての入学者群の内容に強い関心があるなど、受験者とは明白に異なる意志を持っています。学校にとっては、受験者が入学者と転じた後に、学校の存在意識と整合することの予想がもっとも重要なところでしょう。つまり、現状は、大学側から見ると、受験者層が入学試験の態様に適応しすぎていることを意味します。入学試験は、もともと全人格的な総合性を問う形で行うことは無意味ですから、どうしても、全人格的な開花度よりは入学試験への適応度の多寡に基づいた選抜が行われることになります。高等学校が、毅然とした教育目標を掲げ、生徒の全人格的な開花を促すことを意図しているならば、入学試験は、このような形で十分だと思いますが、現状は、高校側の学校経営も絡んで、そう悠長な状況ではないようです。したがって、毅然とした教育を正當に評価し、高校の声望も上がるようにすることは極めて重要だし、大学側も全人格的な開花を図ってきたような受験者層に対しては、安心して、限定的な学力試験で期待すべき入学者群を確保できるはずですが、このための鍵が、想定受験者層の分離というわけなのです。いずれにせよ、(センター試験や模擬試験を含む)入学試験で験されるような内容、形式とは違ったものを導入し、かつ、評価対象は、個々人ではなくて、いわば学校などの集団であることが大切だと思います。それだけに円滑な導入は難しそうですが、さればこそ、入学試験学の対象として、政治的、感情的に中立な価値を確認し、かつ、そのような中立性を担保するような方法で、何らかの形で、こういうことを実施できるようにすべきであって、まさに、入学試験学としての研究成果待ちだと思います。

第6問 誤差について強調していますが、入学試験に誤差があってはならないのではないのでしょうか？

— 回答：「あってはならない」として思考停止することは、入学試験のような微妙な問題への対処では、それこそ、絶対にあってはならないことです。避けられない誤差を正確に認識・評価し、いかに最小化するかと努めるのが正しい姿勢です。実際、入試問題に伴う誤差にはいろいろな要素があり、当然、その分析や、重み、さらに、誤差を極小化するための手法など、考えるべきこと

はたくさんあります。誤差の原因には、最近頻発気味の誤出題のような初等的なものから、細心の注意を払っても不可避な内在的な不確定性までであることを承知して、その性格の分析や管理法を入学試験学として問題にすべきです。

出題内容には難がないとされるとき、しかるべき採点基準に拠る答案の採点結果をそのまま受け入れ、得点数値を絶対視する立場をとってみましょう。例えば、センター試験などのように、いわゆる  $\times$  式の解答に対しては、採点は機械的に行われますから、解答に対し、得点は一義的に決まるものと考えられます。このような場合は、得点数値に予想される誤差は基本的に機械的な性質のもので、入学試験に伴うかもしれない誤差としては副次的なものとして解釈することもできるかも知れません。

一方、記述式の問題では、人間である採点者による採点基準のゆれが採点結果に及ぼす誤差が問題になるでしょう。この場合でも、将来は、自動読み取りやパターン分析といった機械的手段を併用し、あるいは、採点者の採点傾向に統計的な処理を施して、安定した採点結果の実現が図られて、採点結果のゆれを減らすことができるようになるかも知れません。関係する技術開発は、もちろん入学試験学の対象になると思います。

しかし、入学試験の誤差は採点段階で生ずるものだけではありません。そもそも出題方針や設計が微妙な問題を抱えています。このことを誤差の管理という観点から整理することは、それぞれ入学試験学の課題だと思います。さらに、出題方針が定まり、実際に、問題作成がなされても、解答結果を数値化するための不可欠な配点の設計による得点分布に影響が出ます。入学試験の目的を踏まえた配点法も誤差管理の面で重要な研究課題です。ただ、配点の適切性自体は改めて答案を別の配点基準で再処理したものと比較調査すれば、ある程度判断ができることかも知れません。

根本的なことは、入学試験によって得られる数値データと対象となる受験生群について学校側が調査確認したいこととの整合度の把握です。事前予測が重要なところですが、入学試験によって、合格者・不合格者を選別し終えた段階で、他の試験であれば合格したかも知れない不合格者や不合格であったかも知れない合格者についての再検討の機会は失われてしまいます。これは誤差というよりも、不可避的な不確実性ともいうべきかも知れません。入学試験問題の処方の変更と得られるであろう結果の関係がきちんと整理されない限り、誤差の認識もむずかしいので、入学試験学としての研究が待たれませんか。

第7問 よい入学試験というのはどういうものですか？

— 回答：入学試験は、よい、わるいというよりも、適切かどうかの問題で、具体的には、入学試験学としての検討待ちです。しかし、最低の条件は、あまり安易ではないこと、特に、青少年の成長に有害ではないことでしょう。また、選抜以外の目的を持つものもいけません。入試には社会的な習慣や雰囲気に関係していて、合理性だけが問題になるわけではないことがつらいところです。入試関連の判断基準をできる限り合理的なものにするということが入学試験学の自然に浮かび上がってくる目的なのかも知れません。その合理性が実現されたら、入学試験はおのずと適切なものになると思います。とまれ、学校固有の志向に適した入学者を確保するために入学試験が行われるのであり、適切な入学試験が実施できるかどうかは実施母体の学校側の責任に属する部分が非常に大きいと思います。入学試験学が理念、哲学を重要な要素と考えるのは、入学試験の設計母体でもある学校に対する激励をこめているとも言えましょう。

第8問 入学試験学会の立ち上げと言っても、具体的にはどうするのですか？

— 回答：§4 で概観したように、関係するところが広く、周到的な準備が必要です。10人くらいの核となる人たちによる準備委員会を作り、この文書などをたたき台に審議をして、趣意書を作り、具体的な行動計画を練った上で、広く入学試験学会への参加や協力を呼びかけることになります。その間、入試に関心を持つ人たちに入学試験学の重要性(relevance)を訴えて行かなければなりません。当然、数学教育の会の協力は本質的価値があります。

(了)